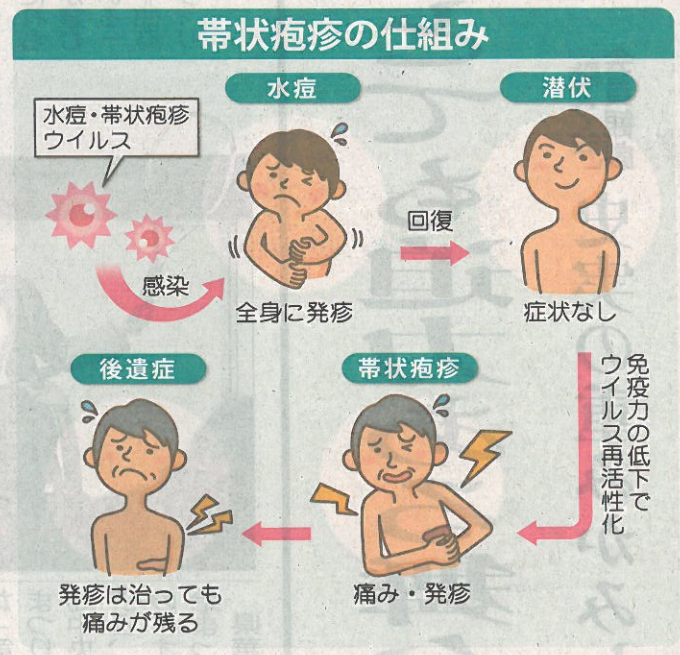
徳島新聞　平成30年1月28日(日)

シニア

帯状疱疹

加齢・ストレスで発症

皮膚の表面に赤い発疹や小さな水ぶくれが帯状に現れる帯状疱疹（たいじょうほうしん）。加齢や疲労などで免疫力が低下すると起こりやすい。特に高齢者は、後遺症の「帯状疱疹後神経痛」によって激しい痛みが続く場合もある。専門医は、早期の治療や予防が大切だと訴えている。（山口和也）



水痘ウイルス再活性化 神経破壊で後遺症も

帯状疱疹は年間60万人がかかり、80歳までに3人に1人が発症するといわれる。

原因は、大半の人が幼児期にかかる水痘（水ぼうそう）と同じ「水痘・帯状疱疹ウイルス」だ。水痘が治った後もウイルスは消滅することなく、体内の神経が集まる神経節に潜伏している。

普段は抑え込まれているウイルスが、加齢やストレスで免疫機能が衰えると再活性化し、神経や皮膚に炎症を引き起こす。徳島大学病院皮膚科の松立吉弘助教は「水痘にかかった人なら誰にでも起こり得る」と注意を呼び掛ける。

症状は、肩や背中、顔などの左右いずれかに出る。目の周囲だと結膜炎や角膜炎、耳の周囲なら顔面神経まひや耳鳴りが生じることもある。

松立吉弘助教

帯状疱疹を発症し、腹部左側に発疹や水ぶくれができた60代の女性（松立助教提供）

治療には抗ウイルス剤が有効だ。2～3日後から効果が現れ、ウイルスの増殖を抑える。高齢になるほど強い痛みが出やすいので、非ステロイド性の鎮痛薬などを使って緩和する。表皮の水ぶくれは2～3週間でかさぶたになり、回復に向かう。

通常、症状の改善に伴って痛みは治まるものの、50歳以上や症状の重い患者は注意してほしい。ウイルスによって神経が破壊され、後遺症の「帯状疱疹後神経痛」になるケースがあるからだ。

損傷した神経は治りにくく、皮膚の炎症が治まっても数カ月から数年にわたり激しい痛みが続く。松立助教は「後遺症を防ぐには、神経がダメージを受ける前から治療を始めないといけない」と早期治療の大切さを強調する。

後遺症の根本的な治療法はなく、痛みを取り除く専門外来「ペインクリニック」での治療となる。神経ブロック注射や抗けいれん薬、麻薬性鎮痛剤といった痛みを和らげる薬を、治療時期や患者の状態に応じて投与する。

入浴やシャワーで患部を温めると、痛みが軽減されるのに加え、後遺症の予防にもつながる。発疹の治りも早くなるため、患部を清潔に保つよう心掛けたい。

高齢者は痛いからといって体を動かさなければ、寝たきりになる恐れがある。松立助教は「発症後は安静に過ごし発疹が治ったら、できるだけ早く元の生活に戻るようにしてほしい」と話している。

ワクチンで予防を

2016年3月から水痘ワクチンの接種が帯状疱疹の予防にも使われている。発症を防ぐだけでなく、重症化や後遺症を抑える効果もあるという。50歳以上が対象だ。

水痘ワクチンは、毒性を弱めた「水痘・帯状疱疹ウイルス」から製造される。国内外で高い効果が実証されているものの、生ワクチンのため免疫不全の患者には使えない。

水痘は、子どもの頃にかかりやすい感染症だ。過去に感染したことのある人が、水痘患者からの感染で帯状疱疹になる恐れはなく、むしろ免疫機能が活発化して発症しにくくなる。このため最も帯状疱疹にかかりにくいのは、子育て世代の30～40代とされる。

しかし、帯状疱疹の水ぶくれに含まれるウイルスからの感染で、水痘を発症する可能性はあるという。発疹が治るまで乳幼児との接触は避けるようにしたい。

14年4月から1～2歳児を対象に水痘ワクチンの定期接種が始まり、水痘患者は減少しつつある。半面、ウイルスと接触する機会が減るため、帯状疱疹にかかりやすくなる。

徳島大学病院皮膚科の松立吉弘助教は「帯状疱疹の患者は増える恐れがあり、ワクチン接種による予防が大切だ」と話している。